

Title	HISTORIOLOGY : 「昔語り」から「歴史認識論」へ
Sub Title	HISTORIOLOGY : From tales of the past to theories of history
Author	佐藤, 正幸(Sato, Masayuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1989
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.58, No.3/4 (1989. 10) ,p.[1(300)]- 22(281)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19891000-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

HISTORIOLOGY

——「昔語り」から「歴史認識論」へ——

佐藤正幸

I

過去を記録する行為としての歴史は昔からのものであるが、「歴史とは何か」、
「歴史をどう書くか」という問いかけもまた同様に古い。ギリシャでは既に2
世紀にルキアノスが『歴史は如何に記述すべきか』を著しているし、中国では
5世紀末に劉勰が『文心彫龍』の中で歴史書について論じている。以後「歴史
とは何か」を論じた書物は、洋の東西を問わず枚挙にいとまがないくらいで、
ヨーロッパ世界に話を限ってみても、16—18世紀の間だけでも400冊以上のもの
が出版されており、⁽¹⁾「歴史の世紀」といわれる19世紀には数えきれない程
の著書・論文が出版されている。これは20世紀に入っても続き、特に1940年代
以降、英米を中心として「歴史は科学か」という問題を軸に「歴史とは何か」
を巡って数多くの議論が展開されてきた。

しかし、ここにひとつの奇妙な事実がある。この研究分野を総称して何と呼
ぶかで、未だに決まった名称がないのである。確かにこれまで数多くの用語が
つくられてきた。その幾つかを列挙してみると、17—18世紀では書名を一瞥し
てみても、*Ars historica*, *Syngramma historiae theoreticae*, *Le Elements
de l'histoire*, *Historia historiae*, *Prologomena historica* といったものが目

につく。19世紀から20世紀の初めにかけては、ドイツを中心に数多くの新しい用語がつくられたが、日本の近代史学形成に影響を与えたものだけを拾ってみても、*Grundriss der Historik, The Method of Historical Study, Einleitung in die Geschichtswissenschaft, Geschichtsphilosophie, La theorie de l'histoire* 等数えきれない。今世紀も中頃になると、英米を中心に様々の新しい用語がつくられた。まず *philosophy of history* は19世紀的観念論の用法の枠を越えて、「歴史とは何か」をさす言葉として使われるようになった。これは「哲学」の意味内容の変化に伴ってきたもので、*theory of history* も同義的に使われるようになった。*philosophy of history* は内容により二分され、歴史の論理的問題を扱う *analytical philosophy of history* と、思弁的・形而上学的な問題を扱う *speculative philosophy of history* とに分かれた。これはそれぞれに *critical philosophy of history, substantive philosophy of history* とも言われている。また19世紀的な意味での歴史哲学はむしろ *philosophical history* 或いは *philosophical interpretation of history* という表現が用いられ、実践的色彩を持っていた史学概論は *introduction to historical study, historical methodology* 等が用いられた。またこれらを総称して *meta-history* なる言葉が使われるようになった。⁽²⁾ もちろん英語によるこれらの用語に対応するものがドイツ語、フランス語等西欧諸国語でも使われ、それぞれの国で同じような議論が行われてきた。

日本語でもこれらの西欧諸国語に対応する翻訳語が数多く生まれた。歴史哲学、歴史論、史学哲学、史学理論、歴史理論、哲学的歴史、史学方法論、歴史方法論、史学研究法、史学概論、等である。これらに加えて昨今は、英米の歴史哲学の影響下に、思弁的歴史哲学、分析的歴史哲学、批判的歴史哲学といった用語も使われている。

まさに言葉の混乱である。この混乱の背後にあるものの考察はあとにゆずるとして、この研究分野を総称する言葉がないものか、史学理論・史学史の研究

に関心を持つ者として以前から気になっていた。というのは、中国においては12世紀頃から「史評」という言葉がこの研究分野の総称として現在に至るまで使われ、最近ではこの分野の研究者を「歴史学家」と呼ぶことも行われているからである。⁽³⁾ 十年程前、*The Oxford English Dictionary* (Oxford, 1884-1928) で History 周辺の言葉を調べていた時に Historiology なる言葉に出会った。そこでの語義は、“The knowledge or study of history” となっており、「歴史とは何か」という研究分野を総称するのに格好な言葉ではないかと考えるようになった。

以後、折りにふれてこの言葉に関する資料を集めてきたが、この用例は極めて少なく、なかなか集まらない。しかしこの言葉について17世紀以降イギリス・アメリカで出版された約100冊ちかくの英語辞書を調べたのを機会に、⁽⁴⁾ 主として英語におけるこの言葉についてまとめてみた。

II

Historiology はラテン語で *historiologia* で、これはギリシャ語の *ιστοριολογία* に由来し、語の構成は *history+logy*, つまりラテン語で、*historia+logia*, ギリシャ語で *ιστορία+λογία* であると多くの辞書で説明されている。

ギリシャ語の *ιστορία* は探究、調査、またはこれらによって得られた知識・情報、或いはこれらを書き記したものの意で、⁽⁵⁾ 現在の *history* より広い意味を持っている。例えばギリシャの歴史家ヘロドトスの『歴史』を考えてみても、その内容は地理学的、民族学的色彩の濃いもので、この本がヨーロッパで16世紀によみがえり、もてはやされたのは、多分に新大陸発見後の異民族と接触する際のバイブルとして使われた、ということからも伺うことができる。⁽⁶⁾

-logy は17世紀後半までは -logie と綴られていた。ギリシャ語で -λογία で、(1) *brachylogy eulogy, tautology, trilogy* のように、“those which have

the sense of 'saying or speaking'” (*O. E. D.*) とか, word, discourse (*S. O. E. D.*), つまり「言うこと, 言葉, 談話」(研究社新英和大辞典), (2) astrology, philology, theology のように, “names of sciences or departments of study” (*O. E. D.*), つまり「学問, 学科, ……論, ……学」(研究社新英和大辞典), というふたつの意味を持っている.⁽⁷⁾ historiology の -logy はこのふたつの意味のどちらなのか. じつはこの段階では明確に両者を区分できない. つまり後で詳しく説明するが, このどちらの意味をとるかで, historiology の語義が歴史的に変遷してくるのである.

さて, 語源及び語の構成は以上のようなものであるが, ここで問題がひとつでてくる. それは「ギリシャ語に由来する」云々である. 最初にギリシャ語源を説いたのは John Minshew の *Minshaei emendatio* (London, 1625, 26, 27) で, historiologie の定義は Henry Cockeram の *The English Dictionarie* (London, 1623) を踏襲しているが, その後でギリシャ語源なることを付け加えている. その後 John Bullokar の *An English Expositor* (London, 1616) の諸版を除いて, 全ての辞書はギリシャ語源に言及しており, ギリシャ語源の注記を除いているのは, John Bullokar 以後は Noah Webster, *American Dictionary of the English Language* (New York, 1828) である. しかしこの辞書の第2版ではギリシャ語源が注記され, 第3版になると再度除かれている. その他19世紀以降の辞書, 例えば John Boag, *A Popular and Complete English Dictionary* (Glasgow, 1848), John Oglivie, *The Imperial Dictionary* (Glasgow, 1850), *A Standard Dictionary of the English Language* (New York, 1890) 等は載せてないが, *A New English Dictionary on Historical Principles* (Oxford, 1884-1928) つまり *The Oxford English Dictionary* と William D. Whitney, *The Century Dictionary* (New York, 1889-1901) とはギリシャ語源としている.

筆者の調べた限りでは, これまでこの言葉のギリシャ語での使用例を探すこ

とは出来なかった。ラテン語、ドイツ語でも、辞書は言うに及ばず歴史書でもこの言葉に未だ出会ったことはない。⁽⁸⁾ 英語以外の辞書でこの言葉に出会ったのは、これまでのところスペイン語の辞書だけである。 *Encyclopedia Universal Ilustrada* (Madrid, 1925) と *Encyclopaedia Universal Sopena* (Barcelona, 1963) は共に *historiologie* の語源をギリシャ語だとしているが、 *Diccionario Encyclopedico U. T. E. H. A.* (Mexico, 1968) は語源をラテン語にしか求めていない。 *Diccionario de la Lengua Española* (Madrid, 1984) は語源には言及していない。

historiology はギリシャ語源である *history* と、同じくギリシャ語源である *-logy* から創られた後世の造語ではないだろうか。

III

イギリスでは17世紀にはいると、ギリシャ語、ラテン語は言うに及ばず、他の数多くの外国語からの借入語が増えてきたため、英語を英語で説明する辞書が必要とされるに至った。最初の英語辞書は Robert Cawdrey の *A Table Alphabeticall* (London, 1604) で、以後数多くの辞書が出版されている。

英語辞書のなかで最初に *historiology* をとりあげているのは John Bullokar, *An English Expositor* (London, 1616) で、

Historiologie: The knowledge and telling of old Histories.

と説明している。

この定義用語である *history* (当時は一般に *historie* と綴られていたが、Bullokar は *history* と綴っている) は当時の辞書では専ら定義用語であって被定義用語(見出し語)ではない。ちなみに Bullokar の辞書にでてくる歴史関係の言葉は、

Historian: A writer or teller of a History

Historicall: Of or belonging to a History

Historiographer: A writer of Histories

ですべてであり, history は採録されていない. history が初めて英語辞書でとりあげられるのは, これより80年後に出された E. Phillips の *The New World of Words* (London, 1696) で,

History: a Description, Or Relation of Things, as they are, or of Actions as they did pass. Apply'd to inanimate things, as a History of Plants, Minerals, Natural Things, &c.

と説明されている.

History が被定義用語として辞書に登場するのがなぜ後れたのかは, 答えるのに難しい問いである. 幾つもの答えがあると思われるが, 筆者の頭に浮かぶのは, この語が多分に抽象語でありながら, 多くの人が説明なしに納得できる (或いは分かっていると信じている) 語であり, かつその納得のしかたも「体験的」なものだからではないだろうか.

さて英語辞書における17世紀から18世紀前半までの historiology の語義は前出の Bullokar もふくめて以下の4つのタイプに分類される.

(1) The knowledge and telling of old histories.

初出は John Bullokar, *An English Expositor* (London, 1616). この語義は1671, 1676, 1684及び1688年の Cambridge 版まで版を重ね, 1719年版は R. Browne が改定出版しているが, この語義は変わってはいない.

(2) Knowledge of Histories.

初出は Henry Cockeram, *The English Dictionarie* (London, 1623) で, J. Minshew, *Minshaei emendatio,* (London, 1627) もこの語義を採用している.

(3) a historical discourse

初出は Edward Phillips, *The New World of English Words* (Lon-

don, 1658) および1696, 1706年版.

(4) a discourse of history

初出は Elisha Coles, *An English Dictionary* (London, 1676). これは多くの版を重ねているが, 初版以降1677, 1717年版も historiology と綴りが変わっただけで語義自体は変わっていない.

その後18世紀において, これらとは違う語義を拾ってみると, John Ash, *The new and complete dictionary of the English language* (London, 1775) では,

Historiology (s. from the Greek *ἱστορία*, history, and *λόγος* a description) The knowledge of history, the art of explaining historical facts.

となっている. これはそれ以前までの語義をふたつ並記したものであるが, この後半の, the art of explaining historical facts という語義は a historical discourse をより厳密にしたもので, この語の性格を一層明確にしている. また, -logy を a description の意としていることも注目すべきである. つまり Ash はこの語を a description of history と考えている. しかし Ash は同時に historiography を, The employment of an historian, the art of writing history と規定しているので, 両者の語義の区別があいまいになってしまっている. これについては後で再検討する.

18世紀には多くの英語辞書が出版されているが, その数に反して historiology を載せている辞書は少ない. 18世紀に出版された英語辞書33冊を調べた限りでは, 上記の Elisha Coles, John Bullokar, John Ash 以外には載っていない. 最初の本格的英語大辞典といわれる Samuel Johnson の *A Dictionary of the English Language* (London, 1755) もこの語を載せていない.

19世紀に入ると, まずこの語は Noah Webster の *An American Dictionary of the English Language* (New York, 1828) 第一版に掲載される.

Historiology, *n.* A discourse on history, or the knowledge of history.

[*Not in use*]

この語義は、そのままではないが Henry Cockeram (London, 1623) をもとにしているようで、改訂増補版 (Springfield, 1848) にはその旨の附記がある。つぎに注目すべきことは [*Not in use*] と注記されていることであるが、これは誤りである。改訂増補版ではこの注記は削除されている。これはあとで述べるように1813年の使用例があったからであろう。

この *Webster's Dictionary* の語義は John Boag, *A popular and complete English Dictionary* (Glasgow, 1848) が踏襲する。

また *Webster's Dictionary* にもとづいてイギリスで出版された辞書である John Oglivie の *The Imperial Dictionary* (Glasgow, 1850) も上記の語義をそのまま載せているが、 [*Not in use*] 或いは *Obs.* とはしていない。

John Oswald は *An Etymological Dictionary* (London, 1834) の中で *historia* の派生語として *historiology* を載せている。

B. H. Smart は *A New Critical Pronouncing Dictionary of the English Language* (London, 1836) で、

Historiology: Knowledge of history

Explanation of history

としている。

A Standard Dictionary of the English Language (New York, 1895) は

Historiology: Historical Science; also a treatise on history

としている。

1884年から Oxford で *A New English Dictionary on Historical Principle* の出版がはじまる。これまでの辞書と比べてこの辞書の特徴は *historiology* についていくつかの用例を載せていることである。これについては後で述べることにして、この辞書は、

Historiology: The knowledge or study of history

としている。これは *The Shorter Oxford English Dictionary* でも同じであり、1989年出版の *The Oxford English Dictionary* 第2版でも、何ら改訂されてはいない。

この次に historiology を載せているのは *The Century Dictionary* (New York, 1914) で、

Historiology: A discourse on history; also the science of history
としている。⁽⁹⁾

A Standard Dictionary of the English Language, *The Oxford English Dictionary* 及び *The Century Dictionary* 等によって historiology は新たな意味を持つようになった。つまり historical science, the study of history および the science of history という語義である。ここにおいて -logy は(2)の学問の意を持つものと解釈された。つまり、「歴史とは何か」といった意味合いを持つに至った。とりわけ the science of history は19世紀中頃から流行した用語で、当時はちょうど歴史学がヨーロッパのアカデミズムの世界で一個の独立した学問として成立する時期であった。例えば G. G. Zerffi の *The Science of History* (London, 1879) は日本では『史学』と訳されているが、⁽¹⁰⁾ 内容は史学理論、史学史、歴史哲学を扱っており、まさしく歴史とは何かを論じた書物であり、また当時においては他にも多くの用例がある。

英語辞書における語義は以上である。1616年の Bullokar 以後、1914年の *The Century Dictionary* までの語義を並べて気付いた幾つの特徴について以下で検討してみるのだが、その前に history という言葉について若干つけ加えておきたい。history はラテン語の historia から来たものであることは先にも述べたが、*The Oxford Latin Dictionary* (Oxford, 1973) で (1) Investigation, inquiry, research, (2) A written account of past events. (3) The recorded knowledge of past events, (4) Study, narrative, とその語義を説明しているように、「過去の事実、過去に起こった出来事そのもの」の意味では

なく、「それらについての記録」の意味であることに注意しなければならない。これは英語辞書でも同じで、*history* の語義をいくつかの辞書で追ってみると、“a Description or Relation of Things……” (E. Phillips, *The New World of Words*, [London, 1696]), “relation of matters of fact” (John Kersey, *A New English Dictionary*,¹⁰ [London, 1702]), “properly a Narrative of Matters of Fact” (E. Phillips, 前掲書, 1706年版), “a Narration or Relation of things as they are, ……” (*Glossographia anglicana nova*, [1707]), “a particular Account of Actions and Things worthy of Note” (John Kersey, the younger, *Dictionary Anglo-Britanicum*, [London, 1708]) といったように、*history* は本来「過去の出来事の記録」の意である。*history* が「過去に起こった出来事そのもの」の意味を持つのは19世紀後半以降で、F. H. ブラッドレーとか R. G. コリンウッドといったオックスフォード哲学者で歴史に関心を持つ人々からはじまったようで、彼らは *history* を (1) *res gestae* (2) *historia rerum gestarum* のふたつの意味を持つとし、ここから歴史の哲学的考察を始めるのであるが、⁽¹¹⁾ 英語辞書にこの語義が登場するのは20世紀になってからで、例えば *The Oxford English Dictionary* では *history* の語義の四番目に *transf.* (転意) として

- a. A series of events (of which the story is or may be told). *Obs.*
- b. The whole train of events connected with a particular country, society, person, thing, etc., and forming the subject of his or its history……
- c. (Without *a* or *pl.*) The aggregate of past event in general; the course of events or human affairs……

としている。これ以後ほとんどの辞書では *history* の語義として「過去の出来事」の意味を載せており、中には語義の最初にこの意味を載せるものまで出ている。⁽¹²⁾

さて historiology であるが、まず語義では大別して二つ、細かく分けると三つである。ひとつは knowledge of history である。この語義は E. Phillips と E. Coles の系統の辞書と *The Century Dictionary* 以外の辞書は全てこの語義を載せている。これは -logy を logos, つまりこの本来の意味である word, discourse の意とし、「ミュトスに対して本当にあることがらに關係する言葉というところから問題の核心たることがらそのもの」⁽¹³⁾ の意味を込めて、「歴史についての知識」「過去の出来事について述べた書物に通じていること」、ひいては「過去の出来事についての知識」をさす言葉として使用したのではないか。

もうひとつは、この knowledge of history 以外の語義である。これらを時代順に抜き出して並べてみると、telling → discourse → art of explaining → discourse → explanation → science and treatise → study → discourse and science となる。まずこれらが -logy のどの意味にあたるか考えてみよう。*The Oxford English Dictionary* の “those which have the sense of ‘saying or speaking’”, つまり語ること、話すことの意味と考えると、telling, explaining はまさはこの意であり、かつ discourse の語義は *The Shorter Oxford English Dictionary* によると、この場合は (3) Communication of thought by speech; talk, conversation, 及び (5) A spoken or written treatment of a subject at length の意であると考えられるから、telling → discourse → art of explaining → discourse → explanation → discourse の系がひとつの流れになるであろう。とするとこの場合、historiology は「歴史を語ること」の意と考えることができる。

このように考えてくると、先に述べたように historiology は historiography と「対」になる言葉であることが分かる。これは、このふたつの言葉を載せている辞書に共通することで、その対応関係をみてみると、historiography, historiology それぞれに、例えば、Elisha Coles (London, 1676)の一連の辞書は、

Historiography: a writing of Histories,

Historiology: a discourse of history,

としている。John Ash, *The new and complete dictionary of the English language* (London, 1775) では、

Historiography: The art of writing history,

Historiology: The art of explaining historical fact,

としており、*The Century Dictionary* (London, 1914) では、

Historiography: The art or employment of writing history,

Historiology: A discourse on history,

といったように、この関連はかなり明確である。つまり historiography は歴史を記すこと、historiology は歴史を語ること、と考えられる。

つぎに第三番目として、上記のふたつに入らない用法、つまり *A Standard Dictionary of the English Language*, *The Oxford English Dictionary* 及び *The Century Dictionary* での historical science, a treatise on history, the study of history, the science of history という語義である。これは -logy の “names of sciences or department of study” (*O. E. D.*), つまり、「学問、学科、……論、……学」の意で、astrology, philology, theology と同じ用法である。この三つの辞書の語義はいずれも19世紀後半以降のものであり、歴史学がアカデミズムの世界で一人前の学問として認められた時期と一致するのは興味深い符合である。⁽¹⁴⁾

以上をまとめてみると、historiology はその来歴から三つの意味をもつ言葉として使われてきた。まず「歴史についての知識」、「歴史を語ること」そして「歴史とは何か」の意である。では辞書での語義から考えたことを、次に用例の上から検討してみよう。

IV

Historiology の用例は極めて少ない。現在筆者が知り得たのは、*The Oxford English Dictionary* にある用例三つと、*The Century Dictionary* にある用例一つと、筆者の見つけた最近の用例二つの計六つである。これらをその原典にまで戻って検討しながら、その用法を通してこの言葉の意味をさぐってみよう。

The Oxford English Dictionary の三つの用例の第一番目は、[1616 Bullokar, *Historiology*, the knowledge and telling of old Histories.] である。これは、先に述べたように、英語辞書で初めて *historiology* をとりあげた J. Bullokar の再録である。

第二番目は、[1682 Bunyan *Holy War*, Introd. lines, 'Tis strange to me that they...that do excel Their equals in historiology Speak not of Mansoul's wars, but let them lie Dead like old Fables.] である。これは『天路歷程』の著者として知られる John Bunyan (1628-1688) の『聖戦』の "To the reader" の冒頭の一節だが、以下省略せずに引用してみる。

'Tis strange to me, that they that love to tell
 Things done of old, yea, and that do excel
 Their equals in Historiology,
 Speak not of Mansoul's wars, but let them lie
 Dead, like old fables, or such worthless things,
 That to the reader no advantage brings;

.....

つまり *historiology* の意味はこの文脈からは、「懐旧談、昔語り」と考えられるし、もう一步踏み込んで *historiology* の前に *love to tell things done of old* とあったり、そのすぐ後で *speak not of Mansoul's wars* とあることから、

「マンソウルの戦いについて通曉している」意であるとも考えることもできる。

第三番目は, [1813 W. Taylor in *Monthly Review*, LXX. 285 Erudition has been divided by a German professor into glossology, bibliography, and historiology.] である。この用例は John Aikin の *The Lives of John Selden* (London, 1812) の書評の一節である。ここでの引用のあとに続く部分が大事であるので、この部分を含めて引用しなおしてみると、

Erudition has been divided by a German professor into glossology, bibliology and historiology; or a knowledge of languages, a knowledge of books, and a knowledge of facts. Truth or science, – that is, the stock of things known, – in as much as it can be advanced by erudition, consists of fact only. Hence, glossology and bibliology are to be considered but as tributary departments, or subordinate employments, which have historiology for their ultimate purpose and result.

となる。重要なのは、historiology を a knowledge of facts と言い換え、glossology と bibliology をそれぞれ a knowledge of languages と a knowledge of books と言い換えているところである。glossology は現在でいう広義の言語学であり、bibliology は図書学或いは書誌学である。また引用文の後半で glossology と bibliology は補助学問、従属作業であるとし、historiology はその究極目標であるとしているところから、historiology は glossology とか bibliology という学問的手続きによって得られた過去の事実の確実な知識と考えられる。

この次に historiology の用例を載せているのは *The Century Dictionary* である。ここでは先に述べたように historiology を a discourse on history; also the science of history と定義したあとで用例をひとつあげている。

Part I is a translation of the Monograph of Diesterweg on Historiology (*Journal of Education*, XIX, No. 2, p. 1)

これはボストンの週刊誌 *Journal of Education* の第19巻2号, 1884年1月10日号の冒頭の新刊紹介の中に出ている一節で, G. Stanley Hall 編 *Methods of Teaching and Studying History* の紹介である. この部分を含むパラグラフを全部抜き出してみると,

Part I is a translation of the Monograph of Diesterweg on historiology, regarded by German teachers as the most helpful treatise in all the voluminous literature upon the subject in their language. It discusses the meaning, uses, classes, limits of historical study; the material, manner of arrangement, aids and methods of teaching; advantages of the study of different periods, and the best order and way of approach, etc..

これよりわかるのは, historiology を the meaning, uses, classes, limits of historical study; the material, manner of arrangements, aids and methods of teaching, advantages of the study of different periods, and the best order and way of approach とその意味するものを紹介していることから分かる通り, 歴史方法論, 歴史研究法, 歴史とは何かといった分野を historiology と考えているようである. ここでは historiology が「歴史とは何か」を研究する分野を意味し, -logy は先に述べた第二番目の意味で使われていることは明らかである.

第五番目の用例は Arthur Child が1960年 *The Journal of Philosophy* (Vol. LVII, Nos. 20 and 21 pp. 665-674) に寄せた論文のタイトルで,

“Thoughts on the Historiology of Neo-Positivism”

と題している. これは新実証主義と呼ばれる英米を中心とした論理実証主義哲学者で, 歴史の理論的側面に関心を持つ者, Karl Popper, W. Dray, Morton White, Patrick Gardiner などの, 歴史における説明の論理を扱った人々の議論をとりあげながら, C. G. Hempel によって提唱された Covering-Law Theo-

ry と呼ばれる歴史の説明理論を検討している論文である。⁽¹⁵⁾ つまり Arthur Child は歴史の論理, 歴史方法論といった意味で *Historiology* を使っている。いわゆる歴史理論とか歴史学の *meta-science* の意味である。

最後の用例は, フランス語であるが, 中国の伝統的歴史記述を論じた Léon Vandermeersch の論文 “L’imaginaire divinatoire dans l’histoire en Chine” (*Storia della Storiografia*, 1988, 14, pp. 12—22.) の中にみられる。著者は, 中国の「書かれたものとしての」歴史はふたつのものから構成されているとし, *ethnographie* と *ethnologie* の関係になぞらえて, それぞれを *historiographie* と *historiologie* とする。そして, 両者をそれぞれ,

Le moment historiographique est celui de la notation des faits, des actes, des événements, au moment même où ils se produisent. Le moment historiologique est celui de la recherche des lois, du sens de l’histoire, à travers les relevés historiographiques.

と規定する。ここでは, *historiographie* は事実を起こったがままに記したものの, *historiologie* は *historiographie* に記された事実のもつ意味を明らかにすること, と考えられている。著者が, *historiographie* は『春秋』の経文を, *historiologie* はその解釈, 特に『公羊伝』を念頭に置いていることを紹介すれば, そのいわんとすることは明らかである。この論文の英文レジュメでは, 次のように書かれている。

History was born in China from two successive practices: divinatory annals (*historiography* which records facts when they happen) and subsequent commentary (*historiology*, which seeks the meaning of history), such as the so-called Gongyang tradition which, at the beginning of the third century B.C., “corrected” the Annals of the Lu region, which had themselves been “corrected” by Confucius.

つまり, この論文では, *historiologie* (*historiology*) は, 歴史の解釈学, 歴史

哲学, 或は, meta-history の意味で使用されていると言える。

以上のような historiology の用例からも分かるとおり, この言葉の意味は, その用例の数は少ないにしても, 時代とともに大きく変化し, 「歴史を語ること」, 「歴史についての知識」, 「歴史とは何か」という意味で使用され, 現在では「歴史理論・歴史哲学」の意味で用いられている。そしてこの用例の歴史的变化は, 辞書は本来言葉の使われ方の変化に応じて語義を加えたり訂正したりしてゆくものであることを考慮に入れると, 先に述べた英語辞書での historiology の意味内容の変化にしかるべく対応しているといえることができる。

V

Historiology があまり使われてこなかった言葉なのは確かであるが, なぜそうだったのかを考えてみよう。

まず「歴史を語る」という意味での historiology であるが, これは history という言葉自体が比較的幅広い意味を持つ言葉で, “narration of events and facts, the knowledge of facts and events” (S. Johnson, 1755), “an account of that which is known to have occurred” (Noah Webster, 1828) 或いは “a relation of incidents” (*The Oxford English Dictionary*, 1884-1928) の意に使われていたため, この意味での historiology にはあまり出番が無かったのはたしかである。

また歴史を語るという行為は, 歴史を書き・読むという行為より古くから行われているもので, 世界各地にみられる通りであるが,⁽¹⁶⁾ 物語る行為としての歴史が時代と共に希薄になり, 文字に記し, 読む行為としての歴史に重点が移ってきたことも見逃すことは出来ない。historiography の方が頻繁に使用されるようになったのは, 人間の文化が文字に極度にたよるようになってきたことと切り離して考えることは出来ない。

しかし historiology の第二の意味である “knowledge of history” なる語義

と、history の語義の一つである “the knowledge of facts and events” とを比べるのは興味深い。例えば (Ash, 1775), (Webster, 1828), (Smart, 1836), (*The Oxford English Dictionary*, 1884-1928) などそれぞれに、このふたつの語義をのせている。このことから historiology が meta-history を意味していることがわかる。つまり history が過去の出来事や事件についての知識、具体的には歴史書・歴史物語をさすとすれば、historiology はそれらの書物の多くに通じた知識の意となる。そして historiology がこの意味で使われていたことは IV の用例の三番目の Erudition の説明からも推測できるとおりである。*The Shorter Oxford English Dictionary* に Erudition として “Acquired book learning” なる定義が載っているのも示唆的である。

さて meta-history という意味での historiology はもうひとつの側面、すなわち認識論的な側面ももっている。つまり history なる認識行為とは何かという問いかけ、ないし反省という側面である。ところがこの意味でも historiology はほとんど使われてこなかった。これは、過去に生起した出来事を記すという行為自体は特別な訓練・技術を持たずとも文字を知るものにとっては可能であったこと、つまり日常的な記録行為であったため、ことさらそのような問いかけが生まれなかったからだ、とは考えられないだろうか。19世紀以前の歴史記述はそのほとんどが事件の顛末・原因・結果をしるすことで満足していて、そこで止まっていたといえる。また歴史記述のスタイルにしても年代記のようにだいたい決まった形式があって、歴史の認識論的疑問はまだ生まれてこず、またそのような要請もなかった。つまり人々の歴史に求めるものが、一般的に言って、故事・来歴・由来といったものに止まっていたためであろうと考えられる。確かに17世紀には歴史懐疑論に関する多くの著作が生まれたが、これは多分に哲学の域にとどまっていた、実際の歴史家にどれほどの影響を与えたかは疑問である。従って多くの歴史書に通暁しているという意味での historiology の用例はあっても、19世紀以前においては、歴史とは何かという認識論的な意

味で historiology が使われることはほとんど無かったと考えられる。⁽¹⁷⁾

さて次に historiology の第三の意味「歴史学とは何か」についてである。歴史研究は昔から盛んに行われてきたが、これが独立した学問分野としてアカデミズムのなかに位置づけられるのは比較的遅く、19世紀まで待たねばならなかった。例えばオックスフォード・ケンブリッジで歴史が独立した教科目になったのは1870年代である。⁽¹⁸⁾ この段階に至って歴史学が厳密な学問的手続きを踏んだものとならざるを得なくなったのは、イギリスにかぎらずドイツ・フランスでもおなじであった。「歴史とは何か」といった認識論的・方法論的基礎づけと、それにのっとった学問的研究が要請されるに至ったわけである。これは historiology の第三の意味である the science of history, the study of history が19世紀後半になって生まれてきたことから明らかである。と同時にこれは先に述べた history のメタ知識という意味での historiology にもかかわってくる。

このように歴史の世紀といわれる19世紀には meta-history の分野でも歴史哲学・史学方法論・史学史といった分野で数多くの研究が生まれてきた。にもかかわらず、「歴史とは何か」という問いかけは常に部分的なものであり続けた。つまり歴史哲学は哲学者の手で行われ、史学理論・史学方法論は歴史記述の技術的問題として扱われ、史学史は歴史家と歴史書の紹介の羅列にすぎなかった。確かに20世紀に入ってから、特に1940年代以後になると、史学理論に関しては、歴史記述の技術論ではなく、より理論的な形での研究が行われてきたが、これも主として歴史哲学者が哲学という俎上で歴史を料理してきたにすぎない。⁽¹⁹⁾ つまり歴史研究の中から「歴史とは何か」という問いかけがなされたのは少ないといわねばならない。

これは確かに当時が歴史学の形成期であったという時代的側面をみのがすこともできないし、また歴史研究の領域が広いため、歴史学がアカデミズムで成立すると同時に、政治史・経済史・文化史といった個々の領域に分化してしま

い、総体としての歴史をみる視点が希薄にならざるを得なかったということも考慮に入れなければならない。

VI

historiology というこれまでほとんど注目されることのなかった言葉の意味内容の歴史的変遷をたどってきたが、本稿の意図したのは、この言葉そのものの言語史的側面だけではなく、その背後にある「歴史に対する姿勢」とでも言うべき歴史意識のありかた及びその変遷の解明でもあった。

これまで述べてきたように historiology のもともとの意味は「昔語り」であり、「昔話に通暁している」意味であったと思われる。これは、この言葉が historiography と対になった言葉と考えられたことからあきらかである。その後文字文化の隆盛と共に historiography のほうに焦点は移って来たが、19世紀にはいって歴史が学問的研究として独立すると、historiology は history に対してその meta-science という意味での歴史論をさす意味に使われるようになり、今世紀に入っては、歴史認識論そのものの意味にまで使われるようになってきた。

にもかかわらず、この言葉の使用される機会がないのは、historiology という言葉そのものに問題があるのではなく、その根底にある「歴史」そのもののあり方を反映しているからではないだろうか。

つまり歴史哲学・史学理論・史学史といった分野が「歴史とは何か」という問いかけを軸にひとつにまとまった分野ではないということができる。

現在ではこれらの分野の総称として Historiography が使われる場合もあるが、⁽²⁰⁾ もし、これらの分野が従来の歴史哲学の紹介や、歴史記述の技術論、歴史書の羅列でことたれりとするのでなく、歴史認識そのものに関わってゆくのだとすれば、意味内容の適切さという点で Historiology という言葉の存在は無視できないであろう。

註

- (1) Astrid Witschi-Bernz (comp.), "Bibliography of Works in the Philosophy of History 1500-1800," *History and Theory*, Beiheft 12 (1972).
- (2) 英米を中心とした20世紀後半の歴史哲学・歴史理論に関しては、拙稿「歴史学における認識されたものの認識について—歴史理論の形成—」(I)『山梨大学教育学部研究報告』第31号, 1979年, pp. 100-109, 参照。
- (3) 詳しくは、拙稿「歴史学における認識されたものの認識について—歴史理論の形成—」(II)第32号, 1980年, pp. 90-98, 参照。「歴史学家」に関しては、例えば張舜徽『中国歴史要籍介紹』(武漢, 1955年), 188頁参照。
- (4) 主として Cambridge University Library 所蔵のものを利用した。以下本稿で引用される辞書の発行地, 発行年は British Library 所蔵のものとは異なるものがあるが、内容が同一のものは、出版年の早い方を引用した。尚、この調査は、筆者がブリティッシュ・カウンシル奨学金により、ケンブリッジ大学チャール・カレッジの客員フェローとして滞在中の1983-84年度に研究の一部として行ったものである。
- (5) *A Greek-English Lexicon* (compiled by H. G. Liddell & R. Scott) (Oxford, 1951), p. 842.
- (6) A. D. Momigliano, "The Place of Herodotus in the History of Historiography," *History*, 43 (1958), pp. 1-13.
- (7) *The Oxford English Dictionary, The Shorter Oxford English Dictionary*, は必要に応じてそれぞれ *O. E. D.*, *S. O. E. D.* と略して表記する。『研究社新英和大辞典』は第五版(1980年)を使用した。
- (8) 但し、この言葉そのものではないが、中世ラテン語—仏語辞典である Albert Blaise の *Lexicon Latinitatis Medii Aevi* (Belgium, 1975) に *historiologus* が載っており、*historien* の意であるとして v. Hugo-Flor の用例があることを指摘している。このことから *historiologia* が中世ラテン語の著作の中で使われていた可能性は高いと考えられる。現代フランス語での用例に関しては、本文 pp. 26-27 参照。
- (9) 初版は (New York, 1889-1891) であるが筆者は利用できなかった。
- (10) 金井圓, 『お雇い外国人(1)—人文科学』(昭和51年), 118-126頁参照。
- (11) F. H. Bradley, *The Presuppositions of Critical History*, Lionel Rubinoff 編 (Chicago, 1968), pp. 83-87. 初版は (Oxford, 1874). W. H. Walsh, *An Introduction to Philosophy of History*, (London, 1951), p. 16.

22 (281) 史学 第58巻 第3, 4合併号.

- (12) これは中国, 或いは日本における「史」或いは「歴史」の概念の変遷と比べると興味深い. 詳しくは拙稿『歴史』: その言葉と概念の変遷』 *Gaidai Bibliotheca*, 43. 1979年参照.
- (13) 『哲学辞典』(平凡社, 1954), p. 1279.
- (14) 西欧諸国語の中では, スペイン語の辞書が, この言葉を取り上げている. そこでの定義は, *Encyclopedia Universal Ilustrada* (Barcelona, 1963) 及び *Encyclopaedia Universal Sopena* (Barcelona, 1963) では共に, *Historiologia* を, *Ciencia que trata de la filosofía de la historia*, *Diccionario Encyclopedico U. T. E. H. A.* (Mexico, 1968) では *Historiologia* を, *Ciencia que tiene por objeto la Filosofía de la Historia*, *Diccionario de la Lengua Española* (Madrid, 1984) では, *Historiologia* を *Theoria de la historia; en especial la que estudia la estructura, leyes o condiciones de la realidad historica.* と定義している. つまり, ここでの定義は筆者のいう第三番目の意味であるとかんがえられる.
- (15) この問題についての詳細は, 拙稿「歴史学における『説明』の構造」『史学』第46巻, 第2号, pp. 145—171, 1974年を参照.
- (16) 日本の上代における「語部」もそうであるが, ヨーロッパでも, 例えば, アイルランドの *filid* は「詩人」と訳されるが, 実際は *senchas* (歴史と翻訳されるが, 本来は「昔話」「言い伝え」の意である) を暗唱する「語部」である. 詳細は, K. Hughes, *The Early Celtic Idea of History and the Modern Historian* (Cambridge, 1977) 参照.
- (17) これは歴史の認識論的問いかけが存在しなかったことを意味するのではない. 例えば, 16—17世紀のフランスには Jean Bodin, Loys Le Roy, Etienne Pasquier, La Popelinière といった歴史認識論に関心を持った人々がいた.
- (18) Jean O. McLachlan, "The Origin and Early Development of the Cambridge Historical Tripos," *Cambridge Historical Review*, 1947-49, pp. 78-105 参照.
- (19) P. Gardiner (ed.), *Theories of History* (New York, 1959) 以降の多くの *anthology* に明らかである.
- (20) 例えば Lester D. Stephens, *Historiography: A Bibliography* (N. J., 1975) 及びその中の数々の論文題目を参照. この本は歴史哲学, 史学理論, 歴史記述技法論, 史学史の文献目録である.